

2013年度関西英語教育学会（第18回）研究大会 概要

6月9日（日）	
12:50～13:45	研究発表・事例報告（①12:50～13:15 ②13:20～13:45）
【第1室】 ① 研究発表:教職課程の大学生を対象とした効果的な教室英語の練習方法と自己効力感に関する実証的研究 松永 舞（京都産業大学）	
教職課程の学生にとって効果的な実践練習の内容・方法を実証的に研究する目的の一環として教室英語を取り上げ、授業の一部として全9回行った練習（2グループ：反復グループと実践グループ）の効果を、練習前後の実技テストの点数の伸びで測定した。また自己効力感の変化もアンケートを用いて測定した。研究課題は（1）練習方法の違いと実技テストの点数の伸びの関係、（2）英語力と実技テストの点数の伸びの関係、（3）自己効力感の変化、であった。反復グループは指導者の発する日本語に合わせて英語で反復する方法、実践グループは小グループで教師役として授業を行う中で練習した。実技テストでは練習範囲（182表現）から選んだ教室英語（34表現）を文法、発音とイントネーション、声の大きさ、適切な速さ、ジェスチャーや表情、の5項目に関して4レベルで評価した。アンケートは同34表現に関して「どの程度スムーズに英語で言うことができるか」を6段階で自己評価する内容であった。統計分析の結果から、両グループとも実技テストの点数に有意な伸びが見られたがグループ間、また英語力による差はなかった。また、自己効力感も両グループとも有意な伸びが見られ、さらに実践グループの方が有意に高かった。これらの結果は、教職課程の授業において教室英語などの練習を行う効果、そしてより実践的に練習することが学生の自信（自己効力感）を促すことを示している。	
【第1室】 ② 事例報告:Using an “Essay map” to Introduce English Writing Structure 塚本 瑞香（関西学院大学）	
Academic writing skills are necessary for non-native speakers for various purposes; however, students, regardless of their proficiency level, struggle to write essays or even a paragraph in English. They find English writing to be challenging and/or complex. Cohesion and structure are two examples of the keys in essay writing that make a big difference in producing essays/paragraphs. This session would try to show how the presenter used an “essay map” to introduce English paragraph structure to the students that are both proficient and less proficient in English. Using an “essay map” and taking a process approach, students are able to produce structured English paragraphs and apply the procedure in producing essays that consisted of multiple paragraphs. In addition, the “essay map” enables the students to self-check whether their essay/paragraphs are cohesive, and makes it easier for the instructors to give comprehensive feedback. The presenter will also refer to some issues found and further implication for the use of “essay maps”.	

2013年度関西英語教育学会（第18回）研究大会 概要

6月9日（日）
12:50～13:45 研究発表・事例報告（①12:50～13:15 ②13:20～13:45）
【第2室】 ① 事例報告:小学校外国語活動における CLIL への挑戦 長谷川 和代（神戸女子大学・非常勤講師） 津田 宏美（神埼郡福崎町立田原小学校）
小学校外国語活動5年生において、担任主導の内容言語総合型学習（CLIL）に取り組んだ事例である。CLILを行うきっかけは、小学校では植物を育てる事、食べ物の産地を調べる事など、さまざまな体験学習を行っていることを目の当たりにしたことであった。それらを既習学習内容とすると、外国語活動にCLILを導入する下地は十分にあると考えた。また、CLILを採用することで、5.6年生の身の丈に合った外国語活動、英語をツールとする体験活動を実践目標とした。 授業内容は、5年生社会科の「食べ物の輸入」と連携させ、身近な食品の原産国調べからグラフ制作へと発展させた。担任の使用言語は英語のみで行うことを目指した。児童は、数の集計などグラフ作成等において第一言語を用いたが発表は英語で行った。本単元の授業数は4時間、授業形態は担任主導。補助として、専科教員、日本人支援者、ALTのいずれかが入った。本発表では、授業資料及び児童による自由記述式自己評価を資料とし、授業者である学級担任の評価と参加した児童の意欲・態度について報告する。
【第2室】 ② 事例報告:文学教育と英語教育の融合を目指して－「和解」を題材に－ 菅田 浩一（四国学院大学）
文部科学省ホームページによると「新しい学習指導要領は、子どもたちの現状をふまえ、「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視」とある。つまり、英語教育では「聞く、話す、読む、書く」という4技能をバランスよく習得させる過程で、思考力や判断力等の育成を視野に入れた総合的な人間教育を行って欲しいということだと思われる。本発表ではこうした指針を念頭に置いて、英語のリーディングの授業に関する実践報告を行いたい。具体的には語彙や文法が比較的簡単なsimple textであるラフカディオ・ハーンの小説の中から「和解(“The Reconciliation”)」を主教材とし、副教材として小林正樹監督の映画『怪談』を使用した授業の実践報告である。映画は作品を読んだ後、ただたんに鑑賞するのではなく、再度テキストに戻って英語読解を深めるような形で使用している。小説と映像という2つの媒体を使用することによって英語を読むことの面白さを伝えると同時に、英語の読解力を伸ばすための自分なりの工夫をお話したい。

2013年度関西英語教育学会（第18回）研究大会 概要

6月9日（日）
12:50～13:45 研究発表・事例報告（①12:50～13:15 ②13:20～13:45）
【第3室】 ① 事例報告:専門高校における ESP 教育の探究 高橋 昌由（大阪府立園芸高等学校）
本発表は、昨年度の授業を含む教育活動について、主に学年末に実施した5件法による質問紙調査結果をもとに、専門高校におけるESP（English for specific purposes）教育を探究するに至った理由を概説し、ESP教育の方途を報告するものである。 着任1年目にあたる昨年度の英語の授業実践は、勤務校における最近の授業方法に倣うこととしたが、生徒の現実も十分に考慮して授業方法を変更していったためか、英語の授業実践についての調査結果における生徒の評価は良好であった。しかし、十分に授業についてこられていなかった現実や、授業外学習をしていない状況は看過できない。光明としては、生徒たちは専門科目の学習は好きで、その学習には取り組んでいたようである。これらから、生徒たちが前向きに取り組む専門教科に関連する英語授業を生徒たちの目線で構築することで、前向きな英語学習が期待できるのではないかと考えた。すなわち、一般英語から生徒たちに合った専門英語への転換である。 ESP教育の方途については、質問紙調査結果をもとに、教師の支援を受けつつも専門教科に関する内容を自分で書き、それをもとに話すことにつなげる授業展開が優れているのではないかと考える。
【第3室】 ② 事例報告:中学校特別支援学級における英語教育について 高木 浩志（宝塚市立宝塚中学校）
特別支援学級でのカリキュラム作成は、とても困難なことである。というのは、支援を必要とする生徒のニーズが多岐にわたるからである。知的障害、情緒障害、難聴、肢体不自由、などの障害に伴って、考えていくことが必要である。従って、通常学級と同一のカリキュラムで英語の授業を行うことは、非常に難しい。独自のカリキュラム作りが必要である。そこで大切なのは「最初のカリキュラムありき」ではなくて、特別支援学級の応じたカリキュラムを作成し、生徒の特性に応じた授業を展開することである。今回の発表では、2年間で2つの学校での特別支援学級での実践を発表し、それぞれの生徒の実態にあわせた英語教育の様子から、普通学級で大切にされたこととどのように違うのかを検証し、もう一度、英語教育の原点を探っていきたい。小学校、教育困難校や進学校での経験をも踏まえた内容ともリンクさせて、データも検証し、これからの英語教育の方向性を探っていきたい。

2013年度関西英語教育学会（第18回）研究大会 概要

6月9日（日）
12:50～13:45 研究発表・事例報告（①12:50～13:15 ②13:20～13:45）
【第4室】 ① 事例報告:小学校 CALL の実践 ー公立小学校のコンピュータ教室での英語学習 佐藤 美紀（大阪大学大学院生）
本研究では、公立小学校におけるCALL（Computer Assisted Language Learning）のプロトタイプを示すことを目的に、一般的な公立小学校のコンピュータ教室にて児童1人に1台のPCを割り当てたCALL授業を実践した。ネイティブ・スピーカーの話すビデオ素材使った筆者の開発教材を用い、3ラウンドシステム理論をもとに、飽きのこない工夫を施しながら繰り返し聞かせた。システム構成としてはLANにつながれたPCを各児童に1台ずつ配置した。ICT活用授業支援ソフトSKYMENU Proにより教員がPCを制御することで児童のPC操作を支援し、各自の自律学習型e-learningを実現した。それとスクリーンによる一斉型e-learningとのブレンディッド・ラーニングを実施した。多くの児童が理解できたという評価を授業後のアンケートの結果で示している。どこの公立小学校にもコンピュータ教室は必ず配置されており、そのコンピュータ教室にあるシステム構成でCALLを実践したことは、小学校におけるCALL授業の普及の可能性を示すのではないだろうか。
【第4室】 ② 事例報告:アナログネイティブ文系女子でもできた! ースマホと無料クラウドサービスを利用した web ベース宿題管理ー 佐藤 浩子（関西大学大学院生）
本発表は発表者が担当する大学1回生必修英語科目の2012年度後期授業にて実施した、スマートフォンを主な媒体とし、Google ドキュメントを利用して行ったwebベースの宿題実践の報告である。発表では（1）Googleドキュメントを利用した宿題配布、回収、及びフィードバック方法について紹介し、（2）従来の紙ベースとwebベースの宿題の相違点を明らかにし、（3）学生の宿題に対する意識調査の結果を発表する。宿題は担当クラス（35名）に対し後期（授業回数30回）の間に合計26回課した。問題は授業の指定教科書から抜粋し、Google フォームを利用して学生にメールで配布した。学生は主に各自のスマートフォンを用いて解答したフォームを返信した。自動返信メール機能を用い、宿題提出直後に自動採点によるフィードバックを送信した。さらに学生の解答が自動的に転記されるGoogle スプレッドシートを毎授業で提示し、宿題へのフィードバックを行った。26回中グループ提出の宿題1回を除く25回分のスプレッドシートから得られたデータから学生が実際にどのように宿題に取り組んだのかを分析し考察する。また、宿題に関する意識調査のデータを分析し、よりよい宿題実践方法を考察する。